病院図書館　2002；22(3)：125-127

特集　司書資格を考える

製薬会社における司書の役割

西村 有未

Ⅰ．はじめに

何かの「資格をとる」ということは、この厳しいご時世に大流行であるが、働きながら資格をとるとなると相当の固い決意と努力がいると思われる。しかし、固い決意を持つ人物でもなく努力家でもない私がなぜあえて司書資格取得の決意をし、どのように資格取得に向けての勉強をし、仕事に役立てているかについて、これから司書資格を取得しようとお考えの方に少しでもご参考になればと思い、自分の思いを書かせていただくことにした。

Ⅱ．医薬情報部門の図書室

私は、入社以来医薬情報部門（以下、医薬情報グループ）に所属しており、そこに併設する図書室業務を一人で担当している。医薬情報グループは、ドラッグ・インフォーメーション（DI）を主に行う部門であり、社外では医師・薬剤師・看護婦・医薬品卸業・一般の方（患者さん）、社内ではMRからの自社製品及び治療に関する問い合わせに対し、データに基づいて科学的に、迅速に、回答する業務を行っている。

弊社は医療用医薬品と一般用医薬品（町の薬局で買える薬）を販売しているが、その双方とも点眼薬が中心の商品構成となっている。また医療用医薬品では、リウマチ治療薬も販売している。そのため問い合わせ内容の大半は、点眼薬・リウマチ治療薬についてであるが、さらに、疾患や治療情報、関連他社製品の情報にも及ぶ場合がある。したがってこれらの質問に答えるには、高度かつ専門的な知識が必要であり、薬剤師資格をもつ専任のスタッフが回答にあたっている。回答にあたっては、文献・学術雑誌・学術図書・自社製品のデータが必要であり、対応者が迅速にこれらの情報を利用できるように整備されていなければならない。つまり、私の仕事は問い合わせを受ける DI 担当者がいかに効率的に回答できるかの資料整備をすることであり、裏方的仕事である。

製薬会社図書室というと、普通は研究所をイメージされる方が多いが、研究所図書館（室）は主に研究者の利用を中心においているために基礎系の情報が中心である。一方、医療の現場に密着した医薬情報部門では、臨床系の雑誌・成書を中心に製品にかかわる公表・未公表文献、会社が作成した各種の書籍、パンフレット類引用資料の整備が不可欠である。そして、これらの情報を図書室として整備充実させることが、利用者である DI 担当者、さらにはその顧客である医師・薬剤師・看護婦・一般の方への貢献だと考えている。

Ⅲ．司書になる動機

参天製薬に入社するまでは、実は私は病院で薬剤師業務に従事していた。したがって、図書や情報に関する知識はほとんど皆無であった。大学で情報関係について少しは講義や実習で行われていたが、大学自体も現在ほど情報についての認識は少なかったように思われる。

にしむら　ゆみ：参天製薬株式会社
医薬情報グループ情報管理チーム
yumi. nishimura@santen. co. jp

私が入社した当時は、個々の担当者が個人的に文献を収集・保管し、成書も必要最低限は書棚に収納してあったが、それ以外の学術図書は個人で購入しそれぞれの机の中にあることが多かった。また、学術雑誌は他の部門も含めてすべて回覧されていたので、いつも10冊以上の雑誌が個人の机の上をまわり、回覧からいつ戻ってくるかも不明であった。よって、問い合わせがあるたびにあらゆる机を捜索して学術図書や学術雑誌を探し回らなければならず、文献については担当者のみぞ知ることで、担当者がいなければ答えられないという状態であった。

このような状況の中で、図書室という名前も存在もなく、またそれを管理する責任者もいなかったが、効率の悪さは明らかであったので、手始めに文献・学術図書を机の中からだしてもらい、学術雑誌の回覧は中止し、共有化することにした。そして、気がつけば自己流で小さな図書室を作りあげており、それが私の業務となっていたというのが正直なところである。しかしあくまでも自己流であるので、分類や目録という概念はまったくなく、単なるリスト作成から出発し、その後、出版社の目録を参考に分類してみたが、眼科・リウマチに特化した蔵書構成ではすぐに行き詰まった。そしてそのたびに新しい分類にしてみたりと試行錯誤を繰り返していた。その時にいつも思っていたのは、何か普遍的な規則をもった分類や整理方法がないものかということであった。

そのような中「薬学図書館」の編集委員を引き受けることとなり、多くの社外の方とお話する機会が増えた。それまでは井の中の蛙的に図書館業務の真似事のような仕事をしていた私にとって、それは大きな刺激となり、転換期となった。薬学図書館編集委員を通じてお話するようになった大学図書館や企業図書館の方は、大変情報に精通しておられ、また「司書」資格をすでに大学で取得された専門家の方が多かった。これらの情報通の方たちとお話するにつれて、それまでも資格の名称は知っていたが「公共図書館で働くために必要な資格」という認識しかなかった「司書」に対する興味がわいてきた。そして、「あのように情報に精通しているのは、司書資格に何かあるに違いない」という好奇心と憧れから司書資格に向けてチャレンジすることにしたわけである。

Ⅳ．勉強

私は近畿大学の通信教育・法学部の科目履修生となった。家庭と働きながらの勉強は確かに大変であり、最大リミットである２年間かかっての資格取得となった。

勉強は主に通勤時間を利用した。通勤時間の勉強だけで資格取得ができるかどうか疑問に思われるだろうが、自己流ながらも長年実務を行ってきた私にとっては、未知な内容もあったが、今まで見聞きした断片的な情報が勉強により統合化される方が多かった。この点、図書館業務をすで行っている者はなかり有利である。また、数々の試行錯誤を繰り返していた私にとっては、なぜ自分が今まで失敗してきたかという理由を振り返れたことと、図書館学についてもっと知りたいという興味が原動力になっていたように思う。こうして何とか憧れの「司書」となることができ、尊敬していた方たちに一歩でも近づけることとなった。

Ⅴ．司書資格をどのように業務に活用しているか、どのように活用したいか

司書資格のための勉強をしている最中も、資格取得後も、なぜ自分が仕事で行き詰まったかを振り返り反省する機会は多くあり、それらを業務に少しずつ反映させた。具体的には、図書の分類は絶対に行き詰まることがない日本十進分類法にすべて分類しなおし、さらに独自分類を加えた。また製品関連文献のデータベース化もすでに行っていたが、主題のとり方に今ひとつ一貫性がなかったので、それも分類法の主題のとり方に合わせることとした。そのほか、細かいこととなるが、図書館実習で習ったブッ

カーの張り方や、図書や雑誌の修理の仕方、所蔵検索などさまざまなことも業務に生かせた。これらのことは社内だけで業務を行っていると決して知り得ないことなので大変役立っている。

また私自身の意識についても大きく変化した部分がある。それは司書が単なる図書・雑誌・文献の整理業務専任者から、社内での情報の専門家という認識に変化していったことである。それまでは、文献・学術図書・学術雑誌等を整備することのすべてが完成した時点で、司書業務そのものは発展し得ないと考えていた。しかし体系的に図書館学を学んだことにより、司書業務の深さを感じるようになった。

現在は、急速なインターネットの発達により、情報源が増大し、情報が氾濫している。また情報提供媒体も、以前のような紙オンリーではなく、さまざまな媒体が存在するようになった。学術図書については CD-ROM であったり、最近は Web 上の契約で電子的に提供されるものもある。また雑誌においては急速に電子ジャーナルが発展し、その電子ジャーナルには有料(単体およびパッケージ)・無料が存在する。それに加え、各出版社競ってのポータルサイトも出現している。これら多くの情報源から、図書室利用者の目的に合った情報源を取捨選択し、それを迅速に整備し情報発信することが必要とされる。

一方、母体機関である会社の経営方針を考慮に入れ、決められた費用を有効に活用しなければならない。また場合によっては、いかに利用者がその情報源を必要としているかを母体機関に理路整然と説明し新しい費用を確保したり、費用対効果の評価や検証ができなければならない。それらの分析業務を行い図書室の情報戦略をたてるのも司書の役割であるという認識が芽生えた。

また最近では、著作権について問題になっているが、著作権を基礎から学んだことを生かし、適正な複写が行われるように社内でイニシアティブをとり、システム化・啓蒙・教育することや、社内著作物の著作権に関する相談業務などにも司書として関与していきたいと考えている。

Ⅵ. 今後さらに活用されるためには

Ⅴでは、実際に行っていることと行っていきたいことを取り混ぜて述べたが、まだまだすべきことは多くあるのが実情であり、より早く理想に近づきたいと考えている。そして意識的な面で常々自分に言い聞かせていることは、①新しい情報源について常に好奇心を持って把握し、評価・分析していくこと、②自分が整備した情報については最低限熟知し、使い方や選択理由をわかりやすく説明できること、③自分がわからないときでも、利用者が何か情報を得るためのきっかけを作る存在となること（どこに行けば、誰に聞けばわかるかもしれないという情報の把握）で、「図書室に来たら手ぶらでは帰さない」ような存在になりたいと思っている。

またこれからの司書や情報関係者は、図書館学だけでなく、IT システム面についてもある程度は知っておかなければならないと感じるので（たとえば電子ジャーナルなどの運用管理)、今後知識を深めたいと考えている。

Ⅶ. おわりに

私が司書資格に向けてチャレンジできたのも、後押ししてくれた上司の存在や周囲の理解があってのことである。周囲に恵まれたことは幸運であったと思うが、その期待を裏切らないような製薬企業における司書としての役割を果たしていきたいと考えている。本当に私論のみとなってしまったが、司書資格を取得したいとお考えの方に、何かのご参考や励ましになれば幸いである。

最後になりましたが、このような機会を与えてくださったことを感謝しております。ありがとうございました。